

ねこのしゅうくん

二年 まみや あおい

しゅうくんは、朝早くへやを出
て、いえの中をさんぽして帰って
きます。そのあと、三時間後ぐら
いにぼくとおかあさんとおとうさ
んがおきます。ぼくとおかあさん

が朝ごはんを食べたらしゅうくん
も朝ごはんを食べます。ごはんを
食べて、ねることが多いです。お
きでいることもあります。ねて、
昼ぐらいになたらおきてごはん
を食べます。午後になたらお日
さまにあたることもあります。お
日さまにあたって、あつくなるよ

すずしいところであつてもあります。ごはんを食べにおきて、九時ごろには、おかあさんのベッドに行きます。

しゅうくんのとくちょうは、グレイで、耳のはだがうすくて、毛は、すこしかありません。目の中のまわりは黄みどりで、中は、

こいみどりです。はなは、黒でマシニールミたいにふあわし
ています。したは、うすいピンク
でうすいしたです。おなかは、毛
がすくなく、白に近い毛です。足
と手には、肉きゅうと言うものが
ついています。肉きゅうは、ぶに
ぶにしています。しっぽもふ

わふわで、おこっでいるときは、
いつもはたばたしていて、いい気
分のときは、るるんしています。
しゅうくんのかわいいところは、
おかあさんのひざにのるところで
す。しゅうくんが鳴くときは、ご
はんがほしいとき、おかあさんに
気づいてほしいとき、おやつがほ

しいとき、あそんでほしいとき、
名前をよばれたときです。

しゅうくんのすきなことは、あ
そぶこと、ねること、おかあさん
といっしょにすること、お日さま
にあたること、おやつを食べるこ
とです。

しゅうくんのすきなばしきは、

高いところ、あたたかいお日さま
のところ、ふわわたしたところ、
新しいところですよ。

しゅうくんがきらいなのは、お
いしさん、しらない人、大きな
音ですよ。

しゅうくんが毎日やることは、
ねること、高いところのべっ、そう

にいくこと、ごはんとおやつを食
べること、トイレにいくこと、お
かあさんといっしょにすること、で
す。

作文を書いて、しゅうくんは、
いろいろなことをやるねこだと思
いました。でもぼくは、しゅうく
んが何をしているのかすべて知り

ません。知らないことも、
ととも
つかんさつしてみたいです。

ドキドキしたあまごつかみ

四年 廣田 花梨

今年の夏休みにアメリカから日本へ帰った時、私は一か月間通った滋賀県のおばあちゃんの家、近所の小学校から、六月二十二日に森林環境学習で「葛川少年自然の家」へ行きました。

私が少年自然の家で体験したことの中で特に印象に残っていることは、あまごつかみで

す。あまごは、琵琶湖にいる、アユと同じくらいの大きさの川魚です。わたしはアユとはちがってあまごは食べたことはなかったけれど、自分でつかんだ魚を食べられると聞いて、行く前からすごく楽しみにしていました。

バスで自然の家に着くと、優しそうな葛川の男の先生が、おけにグールプの人数分のあまごをたくさん泳かせて、待っていてくれました。そして、つかんだあまごを、塩焼きにするために竹くしで口から体全体をさす正し

い方法と、あまごの命をもらう大切さを教え
てくれました。わたしは、最初はあまごを食
べることが単に楽しみでした。けれど、先生
の話の聞くと、私はあまごがかわいそうだと
思い始めました。なぜなら、あまごが元気に
気持ちよさように泳いでいるすがたを見たか
らです。

いよいよ、あまごつかみの時間になりました。
た。あまごは、アユより少し体が太くて背中
に黒いしま模様がありました。先生があまご

をつかみ始めて良いという、みんながいっ
せいに軍手をつけて、おけからあまごをつか
み始めました。私もあまごをつかもうと手を
サッと入れましたが、あまごがにげてなかな
かつかめません。周りから、
つかめた！
という声が聞こえてきました。私はだんだん
あせってきました。私のようにまだつかめて
いなかった人も必死にがんばっていました。
私があと少しであまごをつかめると思っ
て持

ち上げた時、又ル又ルしていてあまごがまた私の手からおけの中にスルッとにげてしまいましたが。またしても失ばいです。私は、あまごがよ。ほど私につかまえられたくないのかと思ひました。すると、

手をゆっくりと水に入れて、つかむほうがうに、そつと水に手を入れて、スイスイ泳い

でいるあまごをあまりギョッとしにぎらないように、優しくつかみました。すると、ヤッタ！今度こそつかまえられました。私は飛び上がるほどうれしかつたです。そして、先生が用意してくれていた竹ぐしを一本もらいました。私は、あまごをさすのがこわくて、かわいそうで、始めはブルブルしていましたが、でも、自然の家の先生が、あまごつかみを通して命をいただくことを教わりましう。

と言っていたことを思い出して、
「命をうばってごめんね、あまごさん。命を
くれてありがとう、あまごさん。」
と思っ、て、私はゆっくり長い竹ぐしをあまご
の口からさしました。

先生たちがあまごを焼いてくれている間、
みんなで自然の中をゆっくりさんさくしまし
た。小雨がふっ、ていたけれど、長ぐつをはい
て緑がいっぱいの森の中を歩くのが気持ち良
かっ、たし、友達とおしゃべりしながらクリの

実を見つけたりしたのも楽しくて、あっとい
う間に時間がすぎました。

「あまごが焼けたよう！」

先生の声がして、とうとう自分でつかまえた
あまごを食べる時間がやってきました。先生
たちが塩焼きしてくれたあまごは、こんがり
していい香りがして、とてもおいしそうで、
私はわくわくしました。そして、

「いただきます。」

とあまごに言、たとき、私はそのあいさつの

本当の意味がわかったような気がしました。
あまごは、少し苦かったけれど、皮がカリ
カリしていてとてもおいしかったです。先生
が教えてくれた時とてもおどろいたのですが
あまごは頭からしっぽまで、骨まで丸ごとみ
んな食べられました。頭も骨も、とてもおい
しかったです。私は、さっきまで泳いでいた
あまごをつかまえた時の気持ちを思い出して、
一つの命を大切にできたことがうれしくなり
ました。

フクちゃん^{ちゃん}の思い出

五年

松浦

奈央

私の家族は、一匹のボストンテリアの犬を飼^うていました。名前はフクちゃん^{ちゃん}で、つい先日亡くな^つてしまいました。フクはとてもかわいくて、面白くて、やさしくて、みんなを笑わせ^て幸せにしてくれました。その思い出は、たくさんあります。

小さい時、フクは引^っぱり^っ二が大好きで

した。自分の毛布をわざわざ二階から一階まで引きず^ってきて、引^っぱり^っ二したい^いと言^って私の前にや^って来ました。私が毛布を取ろうとすると、フクが逃げ出します。追いかけて毛布を取ると、返^して^くとぐいく引^っぱり^っこはいつもフクが勝^って、フクは毛布を自分のベッドまで引きず^っていきます。私がかまた追いかけて休んでいるフクちゃん^{ちゃん}に毛布をかけ^てあげようと手を伸ばすと、フクが

引ッぱって、また引ッぱりッ。こが始まります。
フクは散歩も大好きで、よく興ふんして面白
いことをしていました。フクにリードをつ
ける前にかしージドアを開けると、走ッてド
アにかみつぎ、その後一人で先に行ッて土を
食べ始めてしまします。やッと捕まえてリ
ドをつけると、すぐにまた走ッて行ッてしま
い、リードのひもが伸び切ッて、転んでしま
います。でも、起き上がると、平気そうな顔
で歩いて行きます。

冬の朝は寒いけど、日が当たッている所は
温かいです。日なたぼッ二が大好きだッたフ
クはいつも小さリ、一番温かい日なたをたれ
よりも先にとッていました。少しでもフクの
日なたに入ると、「順番でしょ。」ともん句を
言われて入れません。フクより先に日なたを
とると、後で来たフクに「そニフクの場所な
んだけど。」と言われて、どかなければいけま
せん。

私と妹がまだ赤ちゃんだッた時、お母さん

か、い、な、か、つ、た、ら、フ、ク、が、代、わ、り、に、世、話、を、し、て、
く、れ、ま、し、た、。一、緒、に、遊、ん、だ、り、昼、寝、し、た、り、し、ま、
し、た、。フ、ク、の、顔、を、に、ぎ、つ、て、も、お、こ、ら、な、か、つ、
た、そ、う、で、と、て、も、や、さ、し、か、つ、た、で、す、。
ある日、フ、ク、が、ご、は、ん、を、食、べ、て、い、る、と、え、
さ、が、少、し、鼻、に、つ、き、ま、し、た、。そ、れ、を、気、づ、か、な、い、
で、食、べ、終、わ、る、と、フ、ク、が、「も、つ、と、な、い、」と、鼻、
に、ご、は、ん、を、つ、け、た、ま、ま、聞、い、て、き、た、の、で、み、ん、
な、笑、い、ま、し、た、。

を、歩、い、て、い、た、ら、フ、リ、ス、ビ、ー、を、持、つ、た、妹、が、来、
て、
「フ、ク、、こ、れ、フ、リ、ス、ビ、ー、だ、よ、。い、く、よ、」
と、言、つ、て、フ、リ、ス、ビ、ー、を、投、げ、ま、し、た、。小、さ、い、
こ、ろ、と、同、じ、よ、う、に、腰、を、落、と、し、て、か、ら、二、三、
歩、走、つ、て、フ、リ、ス、ビ、ー、を、追、い、か、け、ま、し、た、。で、も、
「あ、れ、私、走、れ、な、い、ん、だ、」け、し、と、足、を、止、め、
て、行、つ、て、し、ま、い、ま、し、た、。
二、の、よ、う、に、フ、ク、ち、ゃ、ん、の、か、わ、い、い、面、白、
い、や、さ、し、い、思、い、出、か、た、く、さ、ん、あ、り、ま、す、。

でも、フワが老いたあとのある日、フワが水を飲んでいると、水がのどにつまって、息がでできなくなってしまうました。みんなかがかけつけると、数秒後、フワは動かなくなりました。死んでしまいました。二人なにかわいくて、面白くて、やさしかった。たフワちゃんが死んでしまつて、みんなで悲しくてたくさん泣きました。した。

4
フワのい体は、寝ているように見えたので、まだフワが生きているような気がしました。亡くなつた次の日、フワちゃんを火葬してもらいました。フワのすかたが見えなくなつてしまふので、また泣きました。でも、家の中はまだフワがいるような気配もするし、フワは天国へ行つたような気がします。だから、私たちはごはんの時にフワをよんでみたり、空に向かつて話しかけたりしています。フワはいなくなつてしまつて、もうかわいいと二ろや面白いところ、やさしいところが見られなくて残念だけど、フワはまだどこかで私た

ちの二とを見守っているような気がします。
フワとの楽しい生活は終わってしまったけど、
その思い出はたくさん心の中に残っています。
そして、フワの代わりに私はがんばって家族
を幸せにしたいです。
フワちゃん、大好きだよ。またいつか会え
るといいね。